デッチあげ警察と闘う

〈1〉

七〇年安保闘争のなかで幾多の犯罪が警察公安当局の手によってデッチあげられたが、そのなかで「土田・日石・ピース缶爆弾事件」は、全面勝利をかちとるまでにいたっていないが被告弁護人支援者の粘り強い闘いによって警察の犯行を白日の下にさらし、一部の被告は無実を晴らすことができた。この闘いの経験を連載で報告する。（執筆者は「土田・日石・ピース缶爆弾」フレームアップ事件被告＝江口・榎下・中村隆治）

六年余りの獄中生活を経て、去る六月七日に江口良子・前林則子さんの保釈を獲得した。我々のフレームアップ解体闘争にとってまた一つの前進を得ることになったのだと思う。今回は、このデッチあげ事件の説明及び公判闘争等についての報告の詳細は省略し我々をデッチあげた下手人である公安刑事の犯罪性を告発したい。

(1) 〝警視庁の有名な割り屋〟坂本重則

坂本重則というデカは、土田・日石・ピース缶爆弾」フレームアップ策動を手がける前には、「七一年6・17明治公園爆弾」第一次逮捕としてのF氏、S氏等の取調べ刑事（F氏に対する誤認逮捕取調べにあたったもので、Kが公判のために上京するたびに坂本重則はKを自宅に宿泊させて酒、食事のもてなしをしていたということである。

こうした革命家を転向させるのを特技とする坂本重則のことだから、警視庁内ではいわゆる〝落しの名人〟とまで言われていたほどだった。デッチあげられた中村隆治さんの虚偽「自白」調書作成に坂本重則とペアになって加担していた市川敬雄検事の坂本重則評はこうである。

「警視庁の有名な割り屋といいますかね。自白をとる名人が公安部におりまして、この人の手にかかると、今まで否認していった被疑者が立ちどころに落ちて自白するという。自白をとる名人と言われておる人でございますけれども……〈略〉……」（「土田・日石」公判証言より）

「有名な」という言い方は、この場合まさしく「悪名高い」と言い変えるべきだろう。それというのも、「土田・日石」フレームアップ策動を遂行する中で、デッチあげ調書作成にいそしみ〝悪名高き落しの名人〟の正体をあますところなく露呈したと共に、みじめにも自らの〝名声〟の看板を下ろさざるを得ない羽目に陥ったからである。――それは、デッチあげ開始当時、日石郵便局爆発事件のデッチあげストーリーの中の〝名作〟となっていたいわゆる「リレー運搬」ストーリーのその虚構の書作成の中心的役割を率先して果したのがこの〝落しの名人〟なる坂本重則である。

被疑者の無実の訴えを圧殺して供述調書を作文作り作業として、デッチあげをやりまくった結果、ところが後日、実はその事件当日に小金井自動車運転免許試験場で運転免許試験を受けていた、という中村隆治さんの完全なアリバイ出現があった訳だが、これによって自白を強要したのである。

日石郵便局爆発当時（即ち日石郵便局へ差出人が現われた日）の「小包爆弾郵送経過」について、警察・検察はアリバイ工作の一環として榎下一雄→中村隆治→坂本勝治の三名が、次々とリレー運搬をして爆弾が運ばれていったというストーリーを作りあげた。このストーリーのもととなったデッチあげ調書（中村隆治「自白」他）について、リレー運搬の詳細な調書作成の中心的役割を率先して果したのがこの〝落しの名人〟なる坂本重則である。

被疑者の無実の訴えを圧殺して供述調書を作文作り作業として、デッチあげをやりまくった結果、ところが後日、実はその事件当日に小金井自動車運転免許試験場で運転免許試験を受けていた、という中村隆治さんの完全なアリバイ出現があった訳だが、これによって坂本重則がデタラメな調書を作成し続けていたという事実が白日のもとになるに至り、もう坂本重則は大失態をやらかしたことになってしまった。

この失態には更に尾ひれが付く。坂本重則は「土田・日石」事件被疑者とされた者を〝おとした〟ということで、その手口とやらが上司に評価され、警視庁内のある雑誌（「自警」か？）に掲載されることになった。ある時期坂本重則はその原稿を得意満面で持ち歩き、時としてその内容の一部を読んで聞かせるという自慢話を取調室の中でやっていたそうである。だが中村隆治さんのアリバイ出現により当然といえば当然のごとくその原稿は無残にもボツにされてしまい〝落しの名人〟としての面目はまるつぶれとなる有様だったそうな。（つづく）

落ちた〝落しの名人〟
革命家の転向が特技のデカ

私の自己批判と総括

泉水博

〈1〉

子供の時から能力に不信持つ

私のこれまでの生き方は、困難や失敗に遭遇すると、自分には打開、克服の能力がないと投げ出し、そこに向けた努力、闘いをもっというものが薄かったと言えます。子供の頃から一貫して、能力にこだわりをもち「どうせ俺には……」とアキラメ、投げ出して闘うことを回避してきました。またそれが勉強嫌いに拍車をかけ、知識欲、思考力、創造力を停滞させ、発展の契機を逃がして来ました。その都度もつ後悔は反省に至らず、従って教訓の蓄積もなされず、同じ誤りを繰り返すことで過して来たといえます。それが量り知れぬ程多くの害毒を流し続ける生き方となって来ました。しかも自分中心のもののみかた、考えかたしか出来ず、人間関係をみるといったときでも、浅く狭いとらえ方しか出来ず、また、自分を中心とした世界でしか社会との関りをもってこない生き方でありました。

幼少時の父親への憎悪に始まり、出生にまつわることで母親への不信、やがてすべての大人達への不信をもつ中で、ヒガミ、劣等意識の強い性格が形成されました。そこから自分本位となり他との交りの限定を余儀なくし、しかも他を責めることをもってしか人との関係をもてずにありました。結果、愛情のとらえ方一つとっても、ゆがんだものとなっていました。また、交友関係においても、不断に被害者意識にとりかたまる処で、自分より力の弱い者を対象としたものとなり、気弱で内弁慶的存在でしかなく、自身でより弱者としての悲哀をかこつ状況を呈する有り様でした。また一方、小学校三年の頃から行商を、六年頃から近くの八百屋の店員という具合に、早くから商売に携わることで、ズル賢しこさを身につけ、要領をもって人に接する処世術ばかりが発達してゆきました。一見世馴れはしたものの、表面での人当りがいいという丈で裏面でのうす汚ない根性が助長され、陰向日のある子供として成長しました。

内心の欲望として、人と愛し愛されて、共に生きてゆきたいとする思いはもちながら、自らの悪性から人を正しくみることができず、実際に愛されたら愛するというものでしかなかったのです。しかもそれさえ徹底できず、淋しさから何時までも抜け出せぬものとしてありました。その後、金銭をもって、自分の一時的欲望を果せることを憶え、そこから金を価値基準とする思想をもってゆきました。

真に人の心が解らぬゆがんだ性格が、総べて、人は裏面に、自分と同じ心しかもたず、我欲のかたまりでしかない、大は大なり、小は小なりに、喰うか喰われるかの処で生きているとして、これを自分の欲望を満たすための犯罪までも正当化する、理由の一つとしていました。また一方で、そうした自分を少しは嫌悪する心が、義理、人情を美しくすばらしいものとして見る傾向となってゆき、後にヤクザ組織に身を置く結果となりました。人一倍強い、個人主義、利己主義をひきづったままの自分、加えて、現状のその世界の有りようの中で、自分の理解していた義理人情の心を求められる訳はなく、どこまでいっても、個人的なものを理解するにとどまったに過ぎません。むしろより一層個人主義を強める傾向となりました。

しかし、その中で一定それまでの性格、ヒガミは陰をひそめるものがありました。考え方もまだまだせまいものであったとはいえ、自分にとどまらず、組織を対象として出来る様になっていきました。それでも所詮、自分の身のまわりの小さな世界のことでしかなく、また付焼刃でしかない結果として、環境が変わると、すぐにもとにもどって「まわりがそうなら」といった具合に他人をだましてまでも金を得ることに夢中になる始末。また金の切れ目が縁の切れ目となる、現社会の構造から限定された人間関係が解らず、他人が寄って来ると、自分に能力があるかの如く錯覚してとらえ、優えつ感をもち、いざ落目になって他人が離れてしまうと、混乱し、果ては悲観にくれるのみで、その根拠を考えることもせず、アキラメることを、男らしいとしたり、「まえた金さえつかめば……」といった発想しかもたぬ状況でありました。

また、対女性との関係においても、淋しさから解放されたい、痛手をいやしてほしい、なぐさめてほしい等々の思いを内々もった関係でしかなく、しかもその思いをとげることに夢中になると、組織やその他の関係までもみえなくなり、「恩も義理もくそ食え」と自分の都合で突っ走るという状況をもったのです。そのくせ、その世界から離れて、金はつかめない、生きてはゆけないと、片足をかけたままの状態で、何時までも足を抜くことをせず、ズルズルと惰性で過ごすといった意志の弱さをみていました。果ては相手の女性に対して、物質的にも頼るとした甘えも出、ここでも自から破たんを結果する構造をつくっていきました。そしてその場をみると、今度は妬みの心で理性をなくし、しかも陰をひそめていたヒガミ根生までも頭をもたげ、裏切られた、馬鹿にされたとし、またすべては相手が悪いと決めつけ、責めるというものでした。

共犯者を憎み見殺しにする

しかもなお、その自分の姿がみえず、物質的に一人立ちできないのも、金がなかったからだということに思いを馳せ、よりすべてが金で解決されるし、その金をつかんで相手を見返してやるという発想となってゆきました。それを、じんじょうな手段で手中にできなくなると、有り余る者から少し融通してもらう丈と、無茶苦茶な理屈をつけて、ささいな落度につけ込んでは、恐喝して歩くということから、また犯罪に走ってゆきました。果ては強盗殺人という大罪を犯してしまいました。そこに至って、始めて少しは自分のみにくさを気づかされましたが、まだ「目がさめた」「改心」というには、程遠いものでありました。犯罪を考えても、それが建て前でしかなかったことは、以後の獄中における生き方の中に示されています。

千葉刑務所下獄早々にして、先づ権力に対する反感、反発に端を発し、同僚との衝突を繰り返す有り様となり、落ちるところまで落ちた、これ以上は落ち様のないとする開き直りをもち、どう過ごしても無期の刑は変らぬ、出来得る限り自分の好きな様に生きなければ損としてヤケッパチになってゆきました。そして再び他人を踏みつけにする側に身を置いていったのです。刑務所まできてなお他人に馬鹿にされてたまるかとやたら虚勢を張り、他人のことを考えていたら自分は無くなるとして、是否を問うどころか否を承知で行動をし、そのくせ、見栄、外聞を気にする、社会にあった時以上の強引さをもっての過し方をしていました。当時の刑務所内は乱れるだけ乱れ、煙草、酒は勿論とにかく無いものは女だけといったオーバーな表現ではありますが、そんな声がささやかれる程の状況でした。（中見出しは編集部）（つづく）

あぶら

韓国のバス車掌たちの話

〈25〉

鄭泰貞作
K・H訳

人間寄生虫

風邪の流行する季節になると、多くの娘たちが風邪にかかった。しかし限られた人員なので風邪をひいたからといって休ませるわけにもいかず、首までおおうTシャツをきせる程度で仕事に出した。

ヒョスニだけはちょっと風邪きみであれば降車をしなかった。目がひどく落ちくぼんだその娘は、何かもっと重い病気を持っているように思われて、無理な仕事をさせたくなかった。

「舎監さん、ほんとうは私、去年、あのう、この会社にくる前にあの男と知り合いました。その会社はここみたいに車掌の宿舎が別にあるわけでなく、車主の家から通う人もあり、個人で部屋をかりて自炊をしながら働いている人も多かったの。私が会社の近くに部屋を借りている時に、友達の紹介であの人と親しくつきあうようになったんです。毎日、遊びにくるようになって、結局は同棲することになって、私がばかだったのね。舎監さん、あの時、わたしがどうしてそうしたのか、自分でもわかりません。三カ月ぐらいくらしたかしら？私はひどいインフルエンザにかかってのどから血まで吐いたんです」

「まあ、病院には行かなかったの？」

「風邪だからたいした事はないと思ったんです。これくらいなら働いていたらなおるだろうと思っていたが、なおるどころか、だんだんひどくなってひと月もぐあいが悪くて。ふらふらして立ちあがることもできなくなり会社も自然とやめることになったんです。日一日と過ぎて少しよくなったけどお金がなくてはくらせません。あの冬ほど寒い冬もなかったわ。部屋の中でも水がかちかちに凍りついて、一日にラーメン一つの日もあり、それさえ食べられない日もあって、もう言うことなしです」

「その男の人もいっしょに苦労したんでしょう？」

「とんでもない。私の金がなくなるともう用はないのですよ。苦しんでいる私をほっておいて、一日おき、二日おき、しまいには数日に一度、にゅっと顔だけだして、寒い寒いというばかりで座りもせずに立っていたけど行ってしまった……ほんとに薄情でしたよ。私は体の悪いのも二の次で泣きくらしました。それがどうしたのか、ある日、訪ねてきて、自分の時計を質に入れてその金で病院に行こうというから、あまりにもありがたくて、又わあわあ泣きました。これまで私につれなくしていたことが不思議なほどにうってかわり、私の親兄弟よりももっと私を大事にしてくれる人のように思われました。いっしょに病院に行ったら、レントゲンをとった医者が入院しなければならないっていったのではなくて、金がもともとなかったから、私をある程度なおして、すぐこづかいをかせいでくれという、そういう根性だったんですよ。そのことがわかってからは病気がよくなるどころか、ひどくなるようだったわ。ほんとにあきれはてました。とにかく、死ぬにしろ、生きるにしろ、外にでてぶらぶら歩きたいと思いつめて病院から逃げだしたのです」

「病院から逃げだした？病気もなおらないうちに逃げだしてどうしようっていうの？」

社説

闘いの規律で「ヤミ給与」攻撃打破れ！

（1）

鉄建公団に始まる公務員の「ヤミ給与摘発」のキャンペーンが連日新聞をにぎわしている。

だがこれらの「摘発」はむしろほんの一部にすぎず、一つ一つあげれば切りがない程だ。特に中央官庁やその外郭団体の地方事務所や出張所など、少人数で、しかも予算の枠をもっている職場では、年度末ともなればそれこそやりたい放題という情況さえある。

出張の必要などが全くない女子事務員やお茶くみのおばさんが、運転手つきの公用車で温泉地へ「出張」する。余った予算を種々の名目をつけ、何度にも分けて職員に支給するなどという例はそれほどめずらしくもない事だろう。

だがこんな事実をあげつらうのは決っして我々が摘発をやろうというのではない。むしろこれらの事は程度の差こそあれ、公務員の職場であればどこにでもあり、しかも誰もが知っている公然の秘密にすぎないという事なのだ。

キャンペーンを展開している当のマスコミ関係者がこれらの事を一番よく知っていたはずだ。

（2）

誰もが知っている、しかも今に始まった事ではない「ヤミ給与」問題をあえて騒ぎたてている今回のキャンペーンの狙いは明らかだ。増税の強行にあたって、できもしない行政改革を打ち出す事によって世論を納得させようとした政府は、いつの間にか行政改革を「ヤミ給与摘発」へとすりかえていった。しかもその「摘発」は高級官僚や議員をさけ、次第に官公労働者を対象とする方向へと向けられている。

「ヤミ給与」とは法や条例で人件費として決められていない予算枠から支払われるすべてのものをさす言葉として使われている。

だがこの中には二つの性格の違うものがある事を見落してはならない。官公労働者を対象とするものの多くは労使間の交渉によって決められた賃金の一種であり、それが法制化されているか否かはむしろ当局側の責任によるところが多い。これと鉄建公団等のヤミ給与による政治献金等の明らかな汚職とが全く異質なものである事はいうまでもない。

これらの異質なものが同列に語られる事によって、汚職や腐敗にむけられた人民の怒りが、いつのまにか官公労の闘いに対立するエネルギーへとすりかえられようとしている。

（3）

だが民間先行の労働戦線再編、官公労の孤立化の動きが進行する現状の中で、官公労働者はこのようなキャンペーンに対して「既得権のはく奪」であるとしてこれに反対し、あるいは無視するだけで問題はすむだろうか。

十月十三日の夕刊にはついにある市職労のヤミ専従問題がとりあげられ始めた。ヤミ専従についても、ほとんどの自治体関係の組合で実際上行われている制度であり、むしろ当局によって温存さえされてきた制度だ。

このような制度は短期的に見れば確かに運動にとって便利なものではあるかもしれないが、闘いを真に発展させるためには決っしてプラスにはならないだろう。

「ヤミ専従」以外にも、いわゆる革新自治体などでは、市長選や組合の役員選挙前に「福利更生資金」等の名目でいくらかの金が支払われるという労使のなれあい関係も存在している。

「二組のデッチあげやマル生攻撃という当局の正面きった官公労への攻撃はいま全体としてみれば除をひそめ、むしろ組合丸がかえの攻撃がここ数年行われてきた。このような中で官公労幹部は自ら右傾化の道を選び、職場闘争の衰退と、組合離れの傾向が始まっている。

今展開されているヤミ給与キャンペーンはこのような情況につけ込み更に組合を弱体化させようとの狙いにしぼられてきた。

このような中で真に官公労働者の権利を守り、ヤミ給与の張本人、議員や高級官僚へと攻撃のほこ先を転化するためには、官公労働者は今こそ当局とのなれあいを自ら打ち破り、闘う規律を確立する事が必要となっている。

既得権はつねに形がい化し、闘いの阻害物へと転化する。古びた既得権を大胆に放り出し、より大きな既得権の獲得をめざす闘いの中で、「ヤミ給与」キャンペーンを打ち砕こう。

私の自己批判と総括

泉水博

≫2≪

反則事犯にことかかないという状態が外因としてありましたが、すべて自分本位、個人主義の行為で小さな欲望を満たすことに熱中していました。そのことによって、さもみじめさを解消出来ると錯覚をしていたのです。

獄中にあるそのほとんどの人が、社会にあって、追及され、また裏切りを受けて来た人達です。そこで自分を見失い、せつな的に生きる事をやむなしとして来た人達が多く、人間不信の念はあくまで強く、同じ境遇の人達であることを自覚しながらもなお真底相互に助け合い、いたわり合う関係性が持ち得ぬ姿をみせ、皆それぞれが少しでも自分を優位におきたいという発想しかもてなくなっています。

そもそも、権力の側で自分達の保身から、その方向に獄中者を組織、教育しているのが現実であり自己の好むと好まざるとに関係なく、よりこのような状況を強いられる構造となっているのが刑務所の実体です。資本主義社会の赤裸々な、堀の内とあって隠す必要をもたぬ生の形ですべてが取りしきられ、先導されているのです。資本主義社会の縮図そのものであり、その中で下層にあってゆがめられて来た人達がしのぎをけずって他をけ落としても自分だけはとするその争いは苛烈です。各々が身に楯をおびて身がまえ、自分の領分を犯かされぬことに気をくばる処から一定の接触は持てても、誰もが皆裸になることを嫌い、心で結び合うことはむつかしい実状です。皆一様に心では淋しい、悲しいこととしていながら克服を、環境の規制が大きく立ちはだかり、はばみ、逆方向へと組織せざるを得ぬ状況となっています。

先にふれた様に私自身、自分の身が可愛いいとするものがより強い処で、自分の城を築くことに夢中になり、建て前、つもりでは、裏切りの行為をもたなければよしとはするも、そのくせ人の道にはずれた生き方しかしていないことに気づかず、同僚間に直接的に害を多く及ぼす結果を作っていました。そうした自分を、一定省みることが出来る様になった後年においてなお、同様の弱者としてあることに考え及ばず、強者を夢想し、他を同情やあわれみをもって見たり接するということから、互いに助け合い、よりよく生きるとしても実現を見ることは不可能事でありました。人との関係すべてを、自己保身が決定的闘いへと組織出来ず、身をかわしたり、引いたりする、矛盾の解決を回避するものでしかなかったのです。ときにそうした自分を不甲斐なしとするも、何故そうなるのかを考えず、その城にとどまり、そこで今度はブルジョア的忍耐を是とし、欲望、感情を押えることで、何か大人になった気になり、そこから言動までも規制していきました。下獄当初から持った居直りが薄れると、積極性までも欠くものとなりました。意識的に行動範囲をせばめ、不満や自分の意見を抑え、持ち前の処世術をもって、同僚間にとどまらず、権力との対応にまで同様に行ってゆきました。

全く内容のともなわない、権力のいう真面目な懲罰、模範囚といわれる位置に自分を置こうとくだらぬ努力に精をだしていたのです。それを嫌う心が内にありながら、またここにおいても、まわりがそうだからとか、自分だけ取り残される、ふり出しにもどることはもうごめんという処で自身を納得させていたのです。保身がますます前面に出て、自分のカラにとじこもるということで、権力の思うツボにはまっていったのです。そこでのウサを単純にスポーツ、主に野球の中にはらし、気狂いと言われる程に熱中してゆくことで過ごしました。

その後、偶然的に戸籍謄本から母親の死を知り、それがそれまでの生き方を誤りとする転機となりました。すでにその時点から二年前に死亡していたのですが、遅まきながら、その恩を改めて考えてゆくところで、自分の流して来た害毒の大きさを深くとらえられる様になってゆきました。現状の個々にとどまった生き方を改め人のためになる生き方をもつことが、真に犯した罪の償いであり、母親を始め多くの人達から受けて来た恩に報いることとであるとし、それを心に期したのです。それまでの一日も早く社会復帰を果たし、例え社会の片隅であっても、他人のじゃまにならぬ生き方をもつことそして出来ることなら妻をもち、子をもって人並みといわれる生活を幻想していたことが、どれだけ罪の上塗りをして来たかを知りました。母の苛酷な死を想い、また幼くして母親を、そして最愛の妻を殺され、その後をいかに生きているであろう、子と父を想うとき、余りにも身勝手で、甘い夢にひたっている自分が恥ずかしくもまた、腹立たしく思いました。同時に、それまで、自分一人が苦労を背おって生きてきたかの如く考えて来たことの誤り、斯様な自分が人として余りにもちっぽけな存在であり、かつその成長のなさを実感しました。

そこに至って始めて自分を、他人との関連の中に置いてみられる様になりました。駄目な人間なりに勢いっぱい、積極的に生きて行こうと決心しました。しかし、ここにおいて、まだ悲観的になるものは克服するに至らず、その根拠である能力主義を捨てきるに至っていませんでした。

その後、主要に待遇改善の闘争を紆余曲折を経ながら闘ううちに医療問題の闘争に関っていったのです。そこに至る過程での闘争の有り方の典型として、まだまだ過去の自分の体験を通して他人をみる傾向があり、不信感は拭えず、そこで他を頼りとすることは失敗敗北を招くとしておりました。また一定信頼関係にある者に対しては、心情主義のところで距離をもち、自分に闘いの勝利の確信がない分、自分の失敗に巻き込みたくない、傷つけたくない、傷つくのは自分一人で沢山と共に闘うという観点はなく、働きかけをちゅうちょしていました。毎度問題解決は自分一人でとしていたのです。まだ自分の世界からしか見えず、他人のことを考え、他人のためを考えるなら、自分一人でと相も変らぬ個人的なもののみかた、考え方しか出来なかったのです。それが力不足を余儀なくしていることを承知していながら、なお固執した根拠に「俺が」とする意識、それまで闘うことを避けて来た自分をとりもどしたい、そして、うしろめたさの処での意識があったのです。一方義理人情のとらえ方として、犠牲を発揮することで良し、とするものもありました。それらがますます客観的に物事をとらえにくくし、とにかく自分で良しと判断したこと、直感で突っ走ろうということでの闘いを組織していたにすぎません。その延長上で刑務所医療改善要求の闘争をもったのです。

友人として一定親密な関係をもっていた同僚の問題しかも直接死活に関ることからより犠牲的意識が強まり、多分に悲壮感をもった闘いと結果しました。

終始、思想的武装を全くもたぬ闘い故に裁判闘争までも挫折の形で敗北することに結集しました。英雄主義が生命を賭するとし、心情主義が憎むべき敵を見失い、実力闘争も裁判闘争も簡単に敗北しました。しかもまたまた、敗北、悲観主義がアキラメを生み、闘いの総括をも放棄し発展の契機を逸してしまったのです。

その中で、沢山の励ましとお力ぞえをいただきながら主体のだらしなさが故に、何一つとして、それにこたえることもせぬまま、自から闘争を放棄してしまった悔いは、生涯消し去ることが出来ぬ大きな心の傷となりました。この闘いの総括は現在なお問われている私自身の大きな課題であります。

さて、その傷を背おって旭川刑務所に移ったのですが、何の方針も持たぬものであり、充分に出所の見込みもなし、せいぜい権力の憎まれ役に徹するもよし、その中で頑張るさといったことを気休めとし、後めたさから身をかわそうとしていたのです。

権力側のはれものにさわるが如き扱いに腹立ちはもつも、悪い気はせず、それに馴れると、その上にアグラをかき、すっかりその気になるといった態度をもって過ごしました。自然同僚間から頼られるという様になり一応それが出来るというところに自己満足し、発展させるというものとならず、小手先で権力と交渉をもつことを、真正面から敵と対じして闘うという姿勢を持つに至りませんでした。それは心情主義が、なお権力を絶対的に敵視出来ず、相手も同じ人間とするする甘さが敵に乗ずるスキを与え、妥協を余儀なくし、その物足りなさ、不満を「いまに見ていろ」といったことで自分をなだめるに過ぎない日々を送っていました。

相も変わらぬ主体状況にあるとき、日本赤軍のダッカ闘争に関っていきました。それまで日本赤軍に関する認識は皆無に等しく限られた新聞、週間誌等から興味本位で見る程度のものでした。日本赤軍ときけば必然的に連合赤軍とダブラせてとらえていました。連合赤軍に関しては、浅間山荘における銃撃戦をその意も解らぬまま半ば興味本位にみる中で、権力にはむかうという一事で喝采をもってみてました。かと思えば、M作戦、同志ぎゃく殺を冷やかな眼でながめるというものでした。

そこでは「〝革命〟という言葉は便利なもんだ、タタキ、人殺しまで正当化出来るのだから……」といった見方をしていました。ヤクザ組織の有り方も大同小異として、同様の観点からの見方をもっていました。そして、それらは皆自分とは縁遠い処でのこと、よそごととしていました。だから時が過ぎると忘れてしまうという有様でした。つまり革命の〝カ〟の字の認識もない処で、全く無関心でした。

ダッカ闘争については二十八日の朝刊で知りました。そして昼のテレビが中止になり、夕刻のラジオ（昼の録音）二、三〇秒間で、ここでは奪還指名の一名が欠けても人質の命の保証はしないといっ

「人質を救えるなら」指名に出獄を決心

（四面上段へつづく）

ゴー慢さに気付く
「腹に一物」もち付会う

（三面下段からつづく）

た意のもので、これは職員のミスですぐに切られてしまったものです。この二つのニュースから私は人質となっている人達のことを案ずるものがわずか意識されました。

従って、その夜中に自分が奪還の対象となっていると知らされたとき感じたことは「いい加減にしろよ」とする思いでした。しかし指名を受けるか否かのときになって、人質となっている人達のことを考えました。自分が出獄を拒否することで、その人達の身の安全はどうなるか、それを解決する一端は自分が担えるということで、多くの人達の命と自分一個の命をひきかえに出来るならと考えてゆき、そこから指名を受けるか否かを考えることとしました。従って、以後の権力との交渉の過程では、そのことのみをもって当りました。私が出獄を拒否した場合の人質となっている人達の保証を追求し、その結論として出獄の決意をもったのです。つまり、その場の対応に於いて権力側は保証を明確に出来ず、アイマイに答えるということにとどまる状況で、これは以後、東京拘置所に於いて、また、出国前の羽田空港での法務省の係官との場合もすべて同様であったのです。また彼らは、引き止めの理由をいくら並べ様と、私の意をうち消すものは何一つなかったのです。そして最後に「思い上がるな！」の捨てゼリフを残して去るのみであったのです。

さて、自分が身がわりになるとの思いはもったが、実質、人質釈放に関して確かな展望もなく、何一つ戦略、戦術がないまま出国となったのですが、何とかしたいの思いから唯夢中で闘っているだけでした。あれこれ想像的に考えても何一つこれだとするものなど出て来る訳はないのです。その後の新聞一つ読めず、もともとの認識不足もあるし、とにかく「当って砕けろだ！」としたのです。無鉄砲さを含め、後から思えば全く単純な思考、そして正に思い上った姿が当時はとらえられなかったのです。そして最後に「思い上がるな！」の捨てゼリフを残して去るのみであったのです。

さて、自分が身がわりになるとの思いはもったが、実質、人質釈放に関して確かな展望もなく、何一つ戦略、戦術がないまま出国となったのですが、何とかしたいの思いから唯夢中で闘っているだけでした。あれこれ想像的に考えても何一つこれだとするものなど出て来る訳はないのです。その後の新聞一つ読めず、もともとの認識不足もあるし、とにかく「当って砕けろだ！」としたのです。無鉄砲さを含め、後から思えば全く単純な思考、そして正に思い上った姿が当時はとらえられなかったし、捨てゼリフの言葉はきいても反発で受けとめようとしていなかったのです。権力との交渉の過程では、自分でも不思議と思える程、冷静に判断する力をもてたのですが、なおかつ気ずかなかったのは、無意識にそれで良しとする結果であったと思うし、また直感で突走るという所詮その域からの発展のない自分でしかなかったともいえます。

それでは以後、終始人質をとっている人達のことばかりを考えていたかといえば、それは否です。やはり、そこでも、自分のことでのこだわりが多くありました。ときに過去の敗北を精算出来るとしたさもしい根性もあり、並雑視して自分をみたり、結果は解らずとも、例え一時的であっても、獄からの解放を喜びとする思い等々、限りない程の思いが去来していたのが事実であります。しかし、それらが根拠で日本赤軍の指名を受け出獄を希望したのではないということは確信をもっています。過去においてあったように、つもりや一時の思いで安易に考えたり、義務感だとか、宿命であるとか、そうなる運命とかではなく、自分が当然担うべき任務、自分に課す使命であるとの認識のもとで、唯一途、闘いの中に突っこんでいったのです。何があっても、断固最後までやり抜くという固い決意と確信をもっての出発でありました。そして日本赤軍がいかなる集団であろうと人間の集りである以上、誠意をもって、意をつくせば必らず解決される問題であるとしておりました。その誠意とは、建て前や、観念ではなく、いかに身命を賭して、自分を無にした処で事に当たれるかであるとしていました。従ってここにおいては、かって千葉刑務所での闘争時に抱いた悲壮感は全くありませんでした。

日本赤軍が私を指名した意図については、とぼしい認識の中からもう一定推測は出来ましたが、それ以上深く考えなかったこと、また私自身の権力に対する不信反発の結果のみでなく、日本赤軍を絶対的敵と規定せず、かといって味方とせぬ、中途半端な処に自身を位置づけていた現実、ここにおいてすべてが意図的であった訳ではありませんが、自分の思考の傾向として、観念的、建て前となることを知る処で、強いて意識の外にしていたという事実はあります。しかし、思考、言動すべてにおいて、過去の蓄積をもって時に意識的に当てはまるということに過ぎず、しかも十分なものでない処で、その思考、言動において、多くも矛盾が現象として表われていたのが現実です。

すでに前述した様に、目的地に着く直前に指揮官の同志と合い、そこで始めて、私の意志を伝えました。その折りは機が着いてから後に落ち着いて話し合うということで、私自身は、日本赤軍同志達と以後の行動をともにするということになりました。

人質となっていた最後の乗客達と乗務員の人達全員が無事釈放されたことを確認したときは、心から本当によかったとする思いと同時に、担子抜けした思いを実感しました。その後の私自身の意識としては、当初から考えていた、処分を受けるという自覚をもって、一切を日本赤軍に預けました。

しかし、以後も全く変りのない対応と待遇を受けることで過ごし、おどろきを持つと同時に、自分の人間性のせまさ、小ささを思い知らされました。加えて生活を共にする中で、人間として真に生きることを、心で取り組もうと決意した同志達との実感を持ちました。未だ当時は革命をやるという強い意識性のないまま、腰を落ち着け、私の側の結果からみれば、何となくそのまま居座るという感なきにもあらずというかっこうでした。気持においては生活を共にした、わりと早い段階からそう気になるというものがありましたが、それは、闘争を通して、また同志達のその後の日々実践の闘いを見て自分が求め続けて来た、義侠の心が革命の中にあると実感したからです。私をして、そこから日本赤軍との絆が得られたのです。余り抵抗もなく同志達の中に入ってゆけた理由もそこに端を発しています。

扨て、日本赤軍の同志達との生活を始めたものの、先づ「俺は何をすりゃいいんだ」という処でウロウロするというのが実状でした。それでも、学習会参加、日常的に同志達の話しの中から、少しづつ革命ということの理解をしていきました。しかし、なにせマルクスやレーニンのことさえ、どこかできいたこともある名前だな程度の認識しかもっていない私が、革命への参加などとはおこがましくて義理にもいえないとしていた当初でありました。そこでは持ち前の処世術で過ごし、同志と呼びあう関係ではありましたが、その実質はせいぜい友達意識の域は出ないものでした。当時学習会で感じたことは、むづかしい理論をきかされても、俺にはさっぱり解らない、革命の中核部隊となって、人民の中に入って、人民とともにといってるが、こんなことで「人民が解るのかな」という思いを単純にもちました。そこでまた「こりゃ俺の手におえぬ」となり「無能な俺が出来ることは、せいぜい鉄砲もって駆けずりまわることが積の山」としていました。だから、そこでは未だ助っ人根性で関っていたのです。

自己批判―批判の思想闘争のとらえ方にしても、立体的に受けとめ得ず、皆と一緒にやっていたらなんとかなるだろうとその形態丈を憶えるにとどまった。どうやれば自分を変えられるのかを受けとめ得ず、というより理解出来ていなかったのです。それをまた、解らないといえず「みっともない」とか「恥しい」として、さも解ったふりをし、こうあるべきとする建て前の根拠を並べた自己批判をしていました。また、批判においても、これを言ったら可哀想とも、相手に悪い、或いは、自分に不十分性を批判されることを嫌とする処でさけ、率直な提起をせずに流してきました。

たまたまに、ある同志が問題をおこし、それを指導的同志が、自分がつくりだしている問題として自己批判されたとき、おどろきと感銘をうけ、自己批判のすばらしさ、心の広さを実感しました。また一方で、自分が保身で自己批判をやっているのと同様に、同志達が形だけでやっていることがみえるときもあり本当の意味の思想闘争を担うということにはなりえていませんでした。自分の本音はしまっておいて、自己批判―批判を形態だけでやっても、何もかわらないということを、その中で痛切に感じました。

本音をしまっておく結果として、自分の現状をかえることが出来ず、悲観主義の問題が何度も、生じてきました。私がこの敗北的になるときは、前提にいつも、これまで書いて来た中であらわれている能力のとらえ方の誤りがあります。しかしもっと根本的なものとして、これまでの生きてきた過程で苦手とする書くこととか、読むこと、また、自分の未経験な領域、局面での問題に直面すると、行動に移る前に失敗を考え、それを恐れるところで保守的になり、「ダメだ」「無理だ」と結論を出してしまうことです。なおまた、消極的となるため「俺は皆と違うんだ知識もないし、判断力もない」としています。ときに「ヨーシ！」と取っ組んでも、単なる決意でしかないために、三日坊主に終り、より強い悲観敗北主義と結果してきました。これは、他人と自分との比較においてしか、良い点も、悪い点もみることができないことに根拠があると思います。俺は彼よりましと、相手を見下して、自分を優位においたり、その裏がえしが、相手と比較して、俺はダメだと考えるのです。この様に、人と差をつけて、自分をみる処で敗北主義が出るのです。

また、知識や、能力を他人と比較してみることは、共に生きてゆくという力は生れないと知りました。それは、悲観か、それとも根拠のない優越感かのどちらかを生みだすだけで、これでは現在のダメさを克服してゆく力にはならないと思います。その意味で、知識をもつ、また、能力をもつ人間の問題が根本だと思います。私は知識をもつ同志や、また能力がある同志と共に闘う中で、悲観、敗北を結果してきたと同時に、その同志の人間性、思想性の貧しさに気づきました。時に、ヤクザ組織にいた人間の方が、義理も人情もわきまえていたと思うことが幾度かあります。また時に、建て前ばかりをいうと反発をもったこともありました。そこでみたのは、自分と同じ、時に自分よりもおくれていると実感せざるを得ないものでありました。その中で、問われていることは、知識や、能力ではなく、ヨロイをぬいだ、本当の自分をかえてゆくことであると思います。従って、知識をもって、これまで革命活動を何年やって来た同志でも、私のように、突然に革命の世界に入って来た者でも、問われていることは同じであるとの実感をしています。そして、これまでの思想闘争をとおして、そうした知識、能力のある同志ほど、応々にして、自分の本当の姿がみえない実状を多くみてきました。

誰もがダメである現実から出発して、同じ人間として、自分のダメさ、同志のダメさを出し合って、共に克服してゆくこと、その中にこそ、前進の道があると実感しています。誰もが本音を出し合いぶつけ合うこと、それが互いにかえあってゆく根本であると思います。自分自身の過去をふりかえってみるとき、そうしたダメさ、そのものを共に克服しあえるということがなかったことに気づきます。現在、同志達と共に進む中で、人間として生きること、人間が共に生きる社会をつくることの意味を、その中でより強く感じています。いまだに、生きる確信、闘う確信を与えた日本赤軍に入って本当によかったと思っています。

まだまだ、私自身立派ではありません。日本赤軍を、日本革命全体を導いてゆくという意味では十分ではありません。しかし、共に克服するという実践の中で新しい社会を作ってゆけるという確信をもつことが出来ています。全生涯をかけて、日本赤軍と共に革命に尽力致します。二度と挫折はごめんです。人として生きる、共に生きることを同志達と共にめざしてゆきたいと思います。頑張ります。

蛇足ではありますが、新聞において、ダッカ空港以後の私の言動、意を正しくとらえず私が動揺をもって騒ぎだした、かの記事が掲載されていましたが、これを私は、非常な激怒をもって読むと同時に、この様な一面的な形でしか物事がとらえられぬ人達に、人としてあわれを感じ悲しいことの思いをもちました。それは、私達釈放者を乗せた機が附近のパングラデシュ兵士による警戒体制を必要以上に、日本赤軍を刺激させ、面白くない状況を作ってしまうことを危惧するところで、同行の係官（当時の東京拘置所管理部長）に確認をとったところ、彼はその機が何らかの攻撃を受けることを私が心配していると早とちりし、そこからいい可減な返事をかえして来た、そのことに対して腹を立て「馬鹿も休み休み言え。今頃、手前のことなど心配している暇があるかい。もっと相手をみて物を言え」話しにならぬとどなりつけた一件があったのですが、件の記事は他に思い当ることもなく、その時のことだと推察します。その係官は、すでに私の出獄理由を知っていたのですが、おそらく私が勝手な理由をつけて出獄を希望したと、白眼視した見方をしていた結果としての言動であったものでしょう。全く、どこまでもがんばれ、うす汚ない人間の心をみたつけられた思いを抱き、上記心情を持ったのです。

と同時に、日頃獄中者に対して基本的人権をいい、その上やれ矯正教育だ、更生保護だとしている裏で、刑余者、獄中者にいかなる扱いをしているか、また、いかなる権利を保障しているか、口では心を痛めているのは私達法務省関係の者としながら、その実、誰よりも白い眼をもってみているのが実情、そのすべてが建て前で、自分達の都合にあわせたその場その場のゴマカシでしかないのです。ダッカ闘争時の、私の場合にみられた数々の例からも歴然の事実として明らかです。このことをも強い怒りとして、根深く、決して私の心から離れないものとなっています。もとより、私自身、その務め方だけにとどまらず、被害者に対して、遺族の方に対して、またすべての人達に対して流した害毒を償うとする心も、清められた姿とはほど遠いものであることが現実であります。従って単にここで、私の例を出したからといって、私をこう扱ってほしかったということではなく、現実に犯罪者と一度レッテルがついた者に対して、一個の人間としての権利も保障も何らなされていない現体質、この人間関係の中に、資本主義社会に於ける度し難く、消し去ることの出来ない大きな矛盾がある。

私がもしアルジェリアから人質となっていた人達と共に日本へ帰って、事実が明らかにされたらどうなったか、まだつもりの域を出ない私の信義のとらえ方ではありますが、これがなかったらそそくさと日本に帰っていたでしょう。強いてあげずともそうなる条件が、余りにも多くなったことは歴然です。私の出獄希望をとどめようと懸命だった。旭川刑、東拘の所長から看守に至るまでの言葉だけで十分です。この問題は、単に犯罪者を対象としとどまる問題ではなく、すべての人に共通の問題でもあると思います。この一件をもってしても、人として本来あるべき姿は、資本主義社会においては、どこまでいっても持ち得ぬという結論を実感としてとえらることができました。

（中みだしは編集部）